

序

振り返っただけでも「城ブーム」と言われた時代が何回となく繰り返された。戦後まもなくにあった復興天守閣のブームはその最たるものであろう。そして近年の城ブームもハードの整備とは異なった次元ではあるが、隆盛を極めていると言つていい。地域ごとの講演会は毎月のように開かれ、年一回開かれる全国規模のイベントは数万人規模の来場者を集める。以前には想像すらできなかった。背景にはデジタル化の浸透があり、それにより多様な戦国時代ファンが生まれ、以前は中高年男性が主体であった支持層が低年齢層および女性へと拡大したことがある。

加えて、観光を施策とする国の方針も大きな影響を与えた。東京2020オリンピックに向けたインバウンドへの期待は各所の観光地の様相を一変させた。同時にその反動がコロナ禍による経済活動への深刻な影響というコントラストを現出してしまった。しかし城跡へと向かう足は途絶えない。また二〇一九年には文化財保護法が改正された。文化財を活用するという方針のもと、保存とはおよそ対極にあつたはずの観光が共存するという行政のスタイルが出現した。近年の中近世城館の指定・整備の活発化はこのような流れに沿つたものである。

この大きな流れを受けとめつつも、忘れてはならない課題がある。歴史学においては、「城」とは何か! という命題が投げかけられていることである〔網野・石井・福田一九九〇ほか〕。

二十世紀末、中世考古学の進展を受け、また戦後歴史学からの脱却のなかで、城館研究にも新しい視野が求められ

ていた。その当時の城館研究に対する大きな批判として、石井進は北海道の上ノ国勝山館を舞台とした鼎談のなかで、「軍事的拠点論一本槍であり、それがただちに階級支配の拠点論にスライド」すると述べていた〔網野・石井・福田一九〇…二四頁〕。少なくとも石井は歴史学としての城館研究が軍事拠点論だけと認識していた。歴史学から発信される城館の歴史像が「軍事的拠点論一本槍」であるならば、三十年前の社会が城館をどのように理解していたかも推して知るべしと言えようか。

軍事性を重視して城館を考える視点は、江戸時代あるいは近代の世相のなかにもあった。中世の実像を忘却し、武士の道徳、近代国家の思想など軍事を尊ぶ考えのなか、いつしか城の多様性が削ぎ落され、軍事面のみがすべてとなっていたのではなからうか。さらに留意すべきはこの風潮が今日にまでも引きずり続けられている点である。武将個人の武勇を賛美し、殺戮の舞台だった合戦場にロマンを求めるという偏重した理解、この潮流に城館も漂い、武将や合戦場と同様に観光化に結びついてはいないだろうか。無論、城館の持つ軍事性は否定することはできない。しかし、そのみを注視し、そのみを理解の対象とすることは、中世社会の持つた多様性を拒絶することに繋がる。現代の悲劇というべきではなからうか。

このような城館をとりまく課題は、文化財保護・博物館活動の根幹にある保存と活用の課題そのものである。むしろ新規の史跡指定を見渡せば、城館への取り組みが今日の保存と活用の全体に大きく影響を与えてきている。近年の城館を取り巻く様相は危惧すべきように思う。学芸員としてその流れのなかにあつて、自戒も含めて感じるところが少なからずある。ポピュリズムに寄り添った個人の活動が歴史学の成果をなんら検証もせずに、城館の歴史を語るという危険性を生み出してはいないだろうか。

新たな解明のない歴史像では、旧説の緊縛からは解放されない。城館研究と歴史学とが相関関係を持つことの重要性を改めて噛みしめたい。いまの歴史学そして城館研究に求められているのは「城」とは何か！という課題の

解明にある。このことの問題意識を再確認したい。

語彙の分析

「城」とは何か」という問題に文献史学を志す者として、正面から取り組むということは、城館にかかわる語彙の概念規定に取り組むということになる。つまり、網野善彦・笠松宏至・勝俣鎮夫・佐藤進一が追究した中世語彙の視点である「網野・笠松・勝俣・佐藤一九八八ほか」。それぞれの語彙が持つ意味は時代によつて異なっていたがゆえに、中世独特の意味を分析する視点が必要となる。第1部はその視点での論文を配した。

ただし、この分析は簡単なことではない。単純な「城」などの語彙の分析となるので、事例を集積し、比較のなかで語彙の意味を解析しなければならない。ここではデータベースの作成が必要となる。

歴史学研究もデジタル情報化が進展しつつあるなかで、研究機関・図書館等においてはさまざまなデジタル情報が集積され、ICT化のなかで公開されてきた。研究者個人としては、いかにこれらの情報を駆使できるか。このことも近年では研究能力に含まれつつある。しかし、瞬時に検索が可能であっても、それを各自の研究課題に則した情報に加工する作業は必要である。となれば、デジタルデータを単に自身のPCに移行させるのみで済む問題ではなく、まず独自の目的に応じたデータベースを作成する必要がある。つまり、情報元が紙媒体なのか、デジタルなのかの差ではない。

この先駆的な成果は藤木久志による『日本中世気象災害史年表稿』〔藤木二〇〇七〕ということになるのか。この藤木によるデータベースは多くが刊本からの手入力によると思われ、制作に十五年を要したと「はじめに」で触れている。実に根気を要する作業であったと推察される。また、同データベースも紙媒体による刊行であり、デジタルデータの共有化が計られていない。鬼籍にはいられた今、ご力作のデジタルデータの行方も気にかかることである。

おそらく数年先、より一層のICT化が充実するなかで、個人の手入力による作業が省力化され、瞬時に目的別のデータベースに移行・作成されるような研究状況が訪れる(と期待する)。しかしその状況に至る以前である今日あつては、藤木が十五年を賭したような、個人によるデータの集積という長時間を要する営みが求められていることになる。

このような背景を前提として、既存の刊本から「城」「城郭」「要害」「楯」「屋敷」などの語彙の集積を行っている。⁽²⁾ 第1部はその作業の中間段階での成果である。具体的にデータ分析を行ったのは「第2章 南北朝内乱と城館」と「第3章 十五世紀の城館」となるが、その両編に先立つ「第1章 中世城館の規範性」は集積の過程で、「内城」の語彙そのものとその特殊性を発見したことによる。またこの第1部に関連させて『日本城郭史』[齋藤・向井二〇一六]でも集積させたデータベースの成果を反映させつつ、平城タイプの城館の変遷を論じた。

信仰と本拠

第2部は信仰にかかわる施設を軸に中世前期を中心とした本拠のあり方と戦国期の山城タイプのあり方という二つの視点の論考を配した。前半はすでに『中世武士の城』[齋藤二〇〇六]で論じたので、その構想の詳細は同書に譲るが、その具体的事例として論じた論考などを収録した。

城館の変遷を地域史のなかで探る作業を行う際、どうしても戦国期以前の状況が描けないという難点がある。具体的にはその本拠が所在した地点すら不明であるという課題である。この難題に対して関東平野では中世考古学の成果として宮久保遺跡(神奈川県)・阿保境館(埼玉県)・大久保遺跡(埼玉県)など、具体的な発掘調査を経た中世前期の武家本拠の事例を得ることができ、いわゆる方形館を平安末期に位置付ける視点は止揚することができた。しかしながら、まだ中世前期の武家本拠論はその方法論を鍛えるべき段階にある。